熊日1965.06.16

水俣病の研究発表

鬼木湯の児病院医長 全欧州リハビリテーション学会で

水俣市立病院付属湯の児病院の鬼木泰博医長＝写真

ーは、七月四日から英国オックスフォード大学で開かれる第二回全ヨーロッパ・リハビリテーション学会に出席「水俣病の現況とリハビリテーション」について研究発表を行なうことになった。

鬼木医長の発表論文は、熊大医学部整形外科教室の北川敏夫教授との共同研究で、さる四月の日本リハビリテーション・同整形の両学会で発表されたもの。湯の児病院に入院している患者は子どもが二十三人（重患九人、中軽患十四人）おとな十三人（重患三人、中軽患十人）の計三十六人だが、このうち二十一人について十カ月間の治療効果を見た結果、中軽症の患者は正常の七〇％まで復帰できるし、重症患者も特殊なものを除いて、日常生活の動作は身の回りのことができる程度までは直るという。これまで理学療法を中心にしてきたが、今後は網機、床上絵合わせ、医療スポーツなどを利用した作業療法を中心に進める。五月五日の調査では就職および家業についているものが十五人もおり、軽度のものは社会復帰は可能、胎児性小児マヒは長期の治療訓練が必要だ、というのが研究の要旨。同学会は十三カ国の代表が参加、一週間にわたって開かれる。このため鬼木医長は十八日水俣から東京に向かい、二十二日羽田をたつ。